**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第３８回　（２０１７年　１１月０７日）**

**・第３８回の勉強範囲：「第一章　師と弟子」１２頁~１４頁**

・📖 （読む）「師と弟子」１２頁上段Ｌ４～Ｌ５

*ある信者「師よ、もし悪い人たちが私たちに害を与えようとするか、または実際に与えた場合、私たちは黙っているべきでございますか」*

（解説）

これは神の信者の質問です。ふつうの人は、悪い人に対して抵抗をします。暴力で抵抗することもありますね。しかし神の信者は「すべての人の中に神様がいるので、悪い人の中にも神様はいる。だから悪い人に抵抗することは、神様を傷つけることになるのではないか」と考えて、混乱が出ます。

そしてそれに対するシュリー^・ラーマクリシュナの答えが次にあります。

・📖 （読む）「師と弟子」１２頁上段Ｌ６～Ｌ８

*師「社会に暮らす者は、心の邪悪な人びとから自分を守るためにタマス＊をよそおう必要がある。しかし、自分が害されそうだと心配して、相手を害してはいけない。*

（解説）

これは信者に対するとても実践的な助言です。

タマス・グナの性質である「怒る、反対する」などで、悪い人に抵抗します。それは家住者のためには必要なことです。

しかし決して「もしかしたら相手が自分を傷つけるかもしれない」と想像して、先にこちらから相手を傷つけてはいけません。その考えは良くないです。

お坊さんに対しての助言はもっと厳しく、「抵抗をしてはいけません」です。それはもっともっと実践が難しいです。

・📖 （読む）「師と弟子」１２頁上段Ｌ９～１３頁下段Ｌ９

*一つ、話を聞いてください。何人かの牧童がある牧場で牛を飼っていたが、そこには恐ろしい毒ヘビが住んでいた。誰もがそれを恐れて用心していた。ある日、一人の僧侶が牧場を通り過ぎようとした。少年たちは彼のそばにかけ寄って、『お坊さま、どうぞ、そちらには行かないでください。あのあたりに毒ヘビが住んでいます』と言った。僧侶は、『心配するな、私の善い子供たちよ、私はヘビなどは怖くないのだ。マントラ＊を知っているから』と言って、そのまま行ってしまった。*

*しかし牧童たちは恐ろしいのでついては行かなかった。一方、ヘビはかま首をもたげてするすると彼のほうにやって来た。そばに来ると、彼はあるマントラをとなえた。するとヘビは、ミミズのようになって彼の足下に横たわった。僧侶は言った、『これ、お前はなぜ悪いことをしてまわるのだ。さあ、お前にマントラを一つ、授けよう。それをとなえることによって、お前は神を愛することを学ぶであろう。ついにはを悟り、その荒々しい性質を棄てるであろう』と。こうしてヘビにマントラを教え、霊的生活をはじめさせた。ヘビは師の前に頭をさげ、『師よ、どのように修行をしたらよろしいでしょうか』とたずねた。『このマントラをとなえよ。そして誰をも傷つけるな』と師は言った。立ち去るときに僧侶は言った、『また会おう』と。*

*日がたち、牧童たちはヘビがもうとしないのに気づいた。彼らは石を投げた。それでもヘビは怒りを見せず、まるでミミズのようにふるまった。ある日、少年の一人がそれに近づいて尾をつかまえ、ぐるぐるとふり回し、いくども地面にたたきつけた上でほうり投げた。ヘビは血を吐いて意識を失った。動くこともできなかった。気絶したのだ。それでヘビは死んだものと思って、少年たちは行ってしまった。*

*夜更けてヘビは意識を取り戻した。のろのろと、やっとのことで自分をひきずって穴の中に帰った。骨折したのでほとんど動くことができなかった。幾日もすぎた。ヘビは骨と皮にやせ衰えた。ときおり夜中に、食物を探しに外に出るだけだった。少年たちが怖いので昼間は穴を出ることができなかったのだ。師からマントラを受けて以来、他者を害することをやめていた。土や葉や、木から落ちた果実でをつないでいた。*

*約一年ののち、あの僧侶がふたたびやってきてヘビのことをたずねた。牧童たちは、ヘビは死んだと告げた。しかし彼は、牧童たちの言うことを信じなかった。あのヘビは授けられたマントラの果実を得るまでは死なないことを知っていたのだ。彼は例の場所に行き、あちらこちら探しながら自分が与えた名でヘビを呼んだ。師の声をきいてヘビは穴からはい出し、うやうやしく彼の前に頭を下げた。『どうかね』と師はたずねた。『元気でございます』とヘビは答えた。『しかし、なぜそんなにやせたのだ』と師はたずねた。ヘビは答えた、『師よ、あなたは私に、誰をも害するな、とお命じになりました。ですから私は、葉と果実だけで暮らしてまいりました。たぶんそのせいでやせたのでございましょう』と。*

*ヘビはサットワ＊の性質を育てたので、誰に対しても腹を立てることができなかったのだ。牧童たちがほとんど自分を殺すところだったということなどは完全に忘れていた。*

*僧侶は言った、『食物の不足だけでそんなにやせることはありえないよ。何か他の理由があるだろう？　すこし考えてごらん』そこでヘビは、少年たちが自分を地にたたきつけたことを思い出し、それを言った、『はい、師よ、いま思い出しました。少年たちがある日、私を乱暴に地面にたたきつけました。要するに、彼らは無知なのです。どんなに大きな変化が私の心に起こったかということが彼らには分からなかったのでございます。私がもう人をむということも傷つけることもしないなどということを、どうして彼らが知りえましょう』僧侶は叫んだ、『なんということだ！　お前はほんとうに馬鹿だねえ、自分を守る方法を知らないとは。私は噛むなとは命じたが、シューシュー言うことを禁じはしなかっただろう。なぜ、シューシュー言って彼らをおどかさなかったのだ』と。*

*それだから、お前たちも悪い人びとにはシューシュー言わなければいけない。彼らがお前たちを害さないように、彼らを恐ろしがらせなければいけない。しかし決して、毒を注入してはいけないよ。人は他者を傷つけてはならない。*

*神のおつくりになったこの世界には、人、獣たち、草木など実にいろいろなものがある。獣たちの中でも、あるものは善く、あるものは悪い。トラのように恐ろしい獣もいる。ある木々は甘露のように甘い実を結ぶ。また毒の実を結ぶ木もある。同様に人間の中にも善い人びとと悪い人びと、霊的な人びととそうでない人びとがいる。神に献身している人びとがいるかと思うと、世間に執着している人びともある。*

（解説）

最初の、「一つ、話を聞いてください」という言葉は、原書にはありません。

人を外見だけで見ると、目、耳、手、足がそれぞれ二つ、鼻がひとつ、そして同じようにみんな服を着ています。しかし人の内側の性格を観察してみると、とても大きな違いがあることが分かりますね。そのことを理解してシュリー・ラーマクリシュナは人間を大きく二つのグループに分けています。ひとつのグループは、「良い人と悪い人」、もうひとつは「霊的な人と世俗的な人」です。

「良い、悪い」というグループは、動物や木にもあてはまります。

例えばトラは暴力的ですが、牝牛はとても静かです。

また、同じ種類の動物の中にも違いはありますね。例えば散歩に出かけると、さまざまな犬に出会いますが、ある犬はとても静かで、またある犬は攻撃をしたくて「ハウ、ハウ」と吠えます。どちらも犬ですが、性格が違います。穏やかで静かな性格と、暴力的な性格です。

木のことを考えてください。ある木の果実は甘くておいしいですが、毒の果実の木もあります。また同じマンゴーでも、甘いものと酸っぱいものがありますね。

人間もそうです。同じ家族の中にも、上品な兄弟と荒っぽい兄弟がいますね。

**相手を観察してから人間関係を作る**

人間関係を作るときに大事なことは何かを考えてみてください。

例えばある人と今から人間関係をはじめる時に、何が大事ですか？

生徒「相手のことをよく考えて、良く知ること」

そうです。**相手を観察する**ことが一番大事なことです。その人の振る舞い、やり方、何を話しているか、話し方などをまずは黙って観察してください。そして**相手の性格をよく理解して振舞ってください**。それは簡単なことではありませんが、そのようにして上手に人間関係を作ってください。

最初からとても仲良しになるべきではありません。なぜなら後で困る可能性が絶対あるからです。しかし子供は例外です。例えば小学校で友達ができても、中学校に上がりますと、前の人間関係は全くなくなることがありますから、仲良しになっても構いません。成長してからの人間関係は気をつけないといけません。家族や金銭的、経済的なことなどいろいろなことがありますので、よく観察をして気をつけないと後で問題が出ます。

シュリー・ラーマクリシュナの人やものに対する観察力はすごいですね。もちろんシュリー・ラーマクリシュナには特別な力もありました。ガラスのコップの中に何が入っているかが分かるように、シュリー・ラーマクリシュナは人の心の中の考えが分かりました。しかしそのことを抜きにしてもシュリー・ラーマクリシュナの観察力はすごかったです。とてもとても特別です。

そして、人間関係を作るときは、相手をよく観察すると安全です。

もちろん、人間関係ではいつも相手が悪いわけではありません。自分のこともよく観察してください。自分にも問題はあります。ときどき皆さんは「敏感すぎる」という問題があります。それで人間関係を難しくしています。

**人間関係の深さを相手によって決める**

人間関係を作るときには、どれくらい深い人間関係にするかを決めなければなりません。浅い、深い、もっと深い、一番近い、などを区別しないといけません。みんな仲良しということは聖者には可能ですが、ふつうの人には難しいです。

浅い人間関係の相手には挨拶や言葉を交わすだけにします。

もう少し深い人間関係になる人もいます。仲良しの中にも種類がありますね。同じ仲良しでも、例えば自分は神様を好きだが相手は神様のことを好きでない場合の付き合い方と、どちらも神様のことが好きな場合とでは、付き合い方を変えないといけません。そのように人間関係にはたくさん考えることがあります。

そして一番深く近い人間関係を結ぶには、いっぱい観察をしてからにした方がいいです。

・📖 （読む）「師と弟子」１３頁下段Ｌ１０～１４頁上段Ｌ１

*人は四つの階級に分けられるだろう。世間という足に縛られている人びと、解脱を求めている人びと、解脱した人びと、およびつねに永遠に自由な人びとである。*

*つねに永遠に自由な人びとの中には、ナーラダ＊のような賢者たちを数えることができるだろう。彼らは他者の福祉のために、人びとに霊性の真理を教えるために、この世に生きているのだ。*

*束縛されている人びとは、世俗に沈んで神のことは忘れている。間違っても神のことは思い出さない。*

*解脱を求めている人びとは、世間への執着から自分を解放したいと欲している。彼らの中のある者たちは成功し、ある者たちは成功しない。*

*サードゥたちやマハートマー＊たちのように解脱した魂たちは、世間に、つまり『女や金』に巻き込まれることはない。彼らの心は世間には縛られない。それに彼らはつねに神の蓮華のを瞑想している。*

（解説）

シュリー・ラーマクリシュナは霊的な基準で、人を4種類に分けました。

**（１）世間という足枷に縛られている人びと：**

**束縛されている人びとは、世俗に沈んで神のことは忘れている。間違っても神のことは思い出さない。**

その種類の人はいっぱいいますね。皆さん、誤解しないでください。この種類の人の中にも良い人、道徳的な人もいます。この種類の人の良い人とは、非道徳的なことは何もしない、常識的に考えて良い人のことです。

シュリー・ラーマクリシュナは、けっして神様のことを考えない人が悪い人と言っているのではありません。良い人もいますが、霊的な基準でみると、神様のことを全然好きでない人のことです。一般的な人はそれです。

その種類の人は束縛されています。**執着、欲望という鎖で束縛されています**。**束縛の対象は人とモノ、つまり世俗的なものです**。具体的にいうと、人、親戚、お金などです。

『福音』の中でシュリー・ラーマクリシュナは「女と金」という表現を使っていますが、これはシンボルとして使っている言葉です。女というのは異性を指しているので、女性の目線では「男と金」ということになりますね。

世俗的なモノに対して執着すると、それが束縛された状態です。これは解脱と反対でしょ。

では、**解脱のために必要なこと**は何ですか？

　　　**①すべての世俗的なモノに対して、執着、欲望がない（否定的な見方）**

**②永遠なものが好き、無限の存在が好き。それだけが好き　（肯定的な見方）**

この両方が必要です。この種類の人は解脱ができます。

ときどき「人間が嫌い、世俗的なことが嫌い、ですが神様のことも嫌い」という人がいますね。その人は神様が好きではないですから、解脱はできません。

また、「神様のことが好きですが、執着、欲望がいっぱいある」という人もいますね。その人も束縛がいっぱいですから解脱はできません。

**神様を好きでない理由**

ではふつうの人はどうして神様のことをあまり好きではないのでしょうか？

・生徒「親が神様を好きでなかったから」

そうですね、家族が神様のことについて語らなかったので神様のことを知る機会がなかったということもあります。また、大人になってからも何が神様かを知る機会がない人もいますね。

・また、科学者、物質的な哲学者は「神様はいない」と考えています。最近は科学者の言うことを信じる人が多いですから、科学者の本を読んで、神様はいないと信じることもあります。ですが、神様を全く信じていないという人はそんなに多くはありません。

・一般的な人は、神様がいるかどうかを深く考えていない。興味がありません。人生の川に流されているので、今、自分の周りにあるもの、つまり人やお金のことだけを考えることで満足をしています。それ以外のことを何も考えていません。この種類の人は、正月に初詣に神社に行きますが、神様のことが好きだから行くのではなく、周りの人が行くから行きます。伝統儀式ですので行きます。神様がいるかいないか、ということには興味がありません。

その種類の人が神様の場所に行ったり、話を聞いたりしますと、居心地が悪くなってすぐに逃げ出します。

**神様のことがあまり好きでないので、すぐに神前から逃げ出したくなる人の例**

『福音』の中に例があります。

ある人が信者とともにコルカタからドッキネッショルに舟でシュリー・ラーマクリシュナに会いに来ました。二人はシュリー・ラーマクリシュナの部屋に入りました。信者はずっとシュリー・ラーマクリシュナの話を聞きたいですが、もう一人の人はすぐに帰りたくなりました。そして信者に「いつコルカタに戻りますか」と何度も聞きました。信者がなかなか帰ろうとしないので、その人は怒って「舟で待っています」と言って、部屋から出ていってしまいました。　　　☞（『ラーマクリシュナの福音』Ｐ８２下段Ｌ１５～Ｌ２３）

**火葬場の放棄**

神様に興味がない人の知り合いが突然亡くなったとき、弔うために火葬場に行きますと、神様のことをほんの一瞬ですが考えることがあります。しかし家に帰るとすっかりまた忘れて、世俗的な意識が戻ります。

ベンガル語の諺があります。スマシャーナ　バイラーギャ「火葬場の放棄」、スマシャーナが火葬場で、バイラーギャが放棄です。

**神様に興味がない人でも神様を好きになることがある**

神様に興味がない人でも変化をする可能性があります。

ひとつは、**聖者の近くに来て、聖者の恩寵で神様を好きになる**ことがあります。

もうひとつは**大きなショックを受けて、神様のことを好きになる**ことがあります。一度のショックで好きになることもあれば、何回も何回も困難に遭ってから神様を好きになることもあります。それはケースバイケースです。

（第38回『福音』勉強会）以上